

地名の翻訳借用表記創造の 主体をめぐって

——オクスフォード「牛津」を中心に——

千 葉 謙 悟

1. は じ め に

自言語が通用する範囲外の土地を指す固有名詞は他の言語で与えられ運用されていることが普通であるから、それを自言語で表記しようとする場合は対音によるのが一般的である。しかし中国語ではしばしば指摘されるように、他言語による地名を構成要素に分解し、それを自言語のものに置き換える、いわゆる翻訳借用 (loan translation) による地名表記が見られる。この種の表記が中国語の外国地名表記において占める割合は決して高くないのであるが、他言語との比較で見た場合にも、翻訳借用によって地名表記を「創造」という方法は特徴的である。当然のことながら中国語に翻訳借用された表記がもつ発音と、翻訳借用された言語との間にもはや音声的な類似性は保たれない。

本稿ではこの翻訳借用地名に焦点を当て、そのような表記法は中国人が主体的に発想し創造した可能性が高いことを明らかにする。

翻訳借用表記を取り扱った研究はまだまだ少ない。むしろ対音表記にせよ翻訳借用表記にせよ、外国地名表記の研究自体が端緒についたばかりといってよいだろう。そのなかで王敏東1993、荒川清秀1997および2000は翻訳借用地名の問題を取り扱った先駆的論考である。そして王1993はおそらく中国語に関連する翻訳借用地名を扱った論考としては最初のものであろう⁽¹⁾。しかし中国語における表記の問題としてこの現象を本格的に取り上げたのは荒川1997にはじ

まる。また、荒川2000では翻訳借用地名による表記という発想の問題に踏み込んでいる。

そして「ドイツ語というのは、外来のものが入ってきたとき、要素、つまり形態素に分解して逐語訳するという伝統がある。というより、これはもともとギリシア語からラテン語、ラテン語からドイツ語という借用においても古くから見られた現象で、言語学では calque と呼ばれている。こういう伝統を持ったある言語話者が中国語に接したとき、西洋の地名であれ要素に分解して逐語訳をするということが起こったのではないだろうか。ただし、構成要素の意味に基づいて逐語訳するというのは、江戸日本の蘭語学の伝統でもあった」⁽²⁾と述べ、魏源『海国図志』に収録されたドイツ人宣教師ギュッツラフ『万国地理全図集』が翻訳借用表記を多く含むことを挙げて、西洋人宣教師による影響、および逐語訳の伝統が存在していたことから日本語の影響を示唆しているのである。

これに対して本稿では、翻訳借用地名という表記の発想について、それが中国人によるものであるという可能性を考えたい。とはいえ、このことは他の主体、すなわち日本人および西洋人が表記に関して全く影響を与えなかったということを意味するわけではない。当時の状況は相当に複雑であり、中国・西洋・日本という三地域の人々が織りなした影響関係の存在を過度に単純化することはできないであろう。本稿は翻訳借用表記という方法を中心に発想し、創造した主体として中国人が創造した可能性を述べるものである。

2. オクスフォードの表記変遷

オクスフォード (Oxford) というイギリスの地名は現在「牛津」と表記され、ox と ford に分けた上で翻訳借用した表記が定着しており、これが中国語において標準の表記とみなされている⁽³⁾。「牛津」という表記が現れた時期について、これまでは19世紀中は対音表記しか現れず、20世紀初頭に至ってようやく翻訳借用表記が現れると考えられてきた。その例が1905年(光緒31年)の『学部審定 外国地名人辞典』である⁽⁴⁾。

しかし今回、それを12年さかのぼる1893年（光緒19年）に新たな初出例を発見することができた。

まずは、1800年から1900年に至る主要な文献においてあらわれたオクスフォードの表記を瞥見したい。すると、以下のような表記が挙げられる。

- 屋度（『万国地理全図集』20b15）
- 渥斯賀（『四洲志』31b12）1841
- 恵斯賀（『蘭崙偶説』p.121）1846
- 疇哥斯佛爾（『新釈地理備考』6.38b4-5）1847⁽⁵⁾
- 疇哥斯佛爾（『瀛環志略』7.イングランド図）1848
- 阿斯福（『大英国志』4.4a10）1856
- 敖四佛（『航海述奇』）1862
- 阿斯福（『乗槎筆記』）1866
- 哈斯佛（『漫遊隨錄』）1867
- 奧克司芬（『環遊地球新録』）1870
- 額克司佛爾德（『英軺私記』）1876
- 岳斯笏（『英軺私記』）1876
- 阿斯福（『倫敦与巴黎日記』）1877
- 阿思弗（『倫敦与巴黎日記』）1878
- 敖克斯佛（『隨使英俄記』）1878
- 倭格師福爾德（『出使英法俄国日記』）1886
- 牛津（『万国公報』1893-2）
- 岳斯笏（『出使英法義比四国日記』）1894
- 阿克司福穆（『出使英法義比四国日記』）
- 奧刻賜福（『万国公報』）1900-1

（下線筆者）

上表にあるように「牛津」は『万国公報』に初出のあることが今回確かめられたのである。日清戦争前後の時期に最大の部数を誇った報刊から「牛津」という翻訳借用表記が現れた意義は大きいとい

えるだろう⁽⁶⁾。

こうした翻訳借用による地名表記という発想の所在をつきとめるためには、その初出例がきわめて大きな意味を持つ。そこで、いま紹介した『万国公報』の初出例を詳しく検討してみたい。

問題の箇所は『万国公報』1893（光緒19）年2月号である。『万国公報』には毎号末に「西國近事」というコーナーが設けられており、ヨーロッパ諸国の動静が簡潔に伝えられていた。該当箇所はイギリスに関する記事のうち「銀價餘議」という部分である。そこには、

英之牛津大書院有主講之馬君耆宿也。聞銀價之落殊有江河日下之勢、因別創一說云、考古昔在今、西曆紀年之前一千五百年、及後西曆六百年、此二千一百年中、各國都以金銀參用。有時金多、亦有時金少。有時銀多、有時銀少。而其時行使之法、非鑄成金銀洋圓、概不許通用。…（下略）

（下線は筆者による）

「イギリスのオックスフォード大学の教官である馬君（原名は不明：筆者注）は高齢ながら学識豊かな人である。銀の価格が激しく下落していることを聞いて新説を唱えた。いわく「古を研究して今を考察するに、紀元前1500年から紀元後600年までの2100年間、各国はみな金と銀をともに用いてきた。金の多いときもあれば金の少ないときもあった。銀の多いときもあれば銀の少ないときもあった。しかし当時の貨幣行使の決まりとして、金銀を貨幣に鑄造しなければ普通は流通を許さなかった」

とある。冒頭の「英之牛津大書院」はあきらかに「イギリスのオックスフォード大学」を指している。さらに、「西國近事」はほとんどの号で署名記事となっており、冒頭に執筆者の名が記されている。問題の号も例外ではない。その署名をみると

李提摩太口譯

とあって、中国語の文言の文章は「江東老竹」なる人物によるものであることが分かる。李提摩太とは『万国公報』の主要な投稿者の一人であった宣教師ティモシー・リチャード (Timothy Richard) のことである。「江東老竹」という筆名は誰のことか断言することはできないが、中国人であることは疑いない⁽⁷⁾。19世紀末まで、欧米人が中国語で文章を書き表そうと思ったならば、まず西洋人が内容を口頭で伝え、それを中国人が文章語として潤色し筆記するというスタイルを取るのが常だったからである。口述者も筆述者ともに西洋人であるということは当時の翻訳の状況からして考えにくいし、(それならば西洋人同士で口述者・筆述者という役割分担は不要であろう)『万国公報』に関係していた西洋人宣教師が「江東老竹」と名乗っていた例はない。

付け加えるならば、『万国公報』に「牛津」という表記が現れた1893 (光緒19) 年は日清戦争以前のことであり、留日学生が大幅に増加する以前の時期である。したがって「牛津」なる表記が日本から入った表記である可能性は低いと思われる。つまり、少なくとも日本人以外の——すなわち中国人または西洋人の——発想によって創造された表記であると考えられるだろう。

また、Oxford という表記を翻訳借用するための工具書がはたして当時の中国にあったかどうかを考えるならば、英華字典に関する検討が不可欠であると思われる⁽⁸⁾。地名を構成要素に分解するといっても、その要素の意味を中国語に置き換えるための情報がなければ翻訳借用によって地名を創造することは難しいからである。さらには宣教師の文章の翻訳や口述筆記の潤色において当時の中国人の大きな助けとなったのはまさに英華字典であったという事実も忘れてはならない。

英華字典は西洋人によるもの、中国人によるものを問わず簡繁さまざまなものが出版されており、その質も千差万別であるが、オクスフォードという地名についてみた場合、その構成要素たる ox も

ford も、ともに主要な英華字典に掲載されている語であった。19世紀の代表的な英華字典を引くと、

〈ox〉

Williams『英華韻府歷階』(1844): ox; 𪛗牛

Medhurst 'English and Chinese Dictionary' (1847): OX, 牛

Lobscheid『英華字典』(1866-69): Ox, 牛

Doolittle『英華萃林韻府』(1872): Ox, 𪛗牛

鄭其照『字典集成』(1875): Ox, 牛; 𪛗牛

梁述之『華英字彙』(1878): Ox, 牛; 𪛗牛

〈ford〉

Williams 1844: ford; 津、渉…

Medhurst 'English and Chinese Dictionary': —

Lobscheid 1866-69: Ford, 津、通津、津口…

Doolittle『英華萃林韻府』: ford, or pass across, to, 津、濟水之處、渉水處

鄭其照『字典集成』: FORD, 津、濟水之處、渉水處

梁述之『華英字彙』: FORD, 津; 渉

という説明が加えられていることが分かる⁽⁹⁾。

こうした英華字典を参照すれば、Oxford を ox と ford に分解し、「牛」「津」に翻訳借用して再構成することに問題はなかったであろう。つまり、『万国公報』に現れた「牛津」という表記は、英語に通曉していない中国人でも創造しうる立場にあったことがわかるのである。

3. 表記の方法および翻訳借用の不对応をめぐって

3-1. ギュッツラフ『万国地理全図集』

本節ではギュッツラフの世界地理概説書『万国地理全図集』にあらわれた翻訳借用表記から、西洋人による創造の契機が中国人によ

る可能性よりも低く、したがって翻訳借用表記は中国人による創造である可能性が高いということを明らかにしたい。

カール・フリードリヒ・アウグスト・ギュッツラフ (Karl Friedrich August Güzclaff, 1803・嘉慶8－1851・咸豊元) はドイツ人宣教師。中国名は郭実獵、または郭士立、郭甲獵など。1826 (道光6) 年にロッテルダムの神学院を卒業し、オランダ領東インドに派遣された。後にロンドン会に招かれ、シンガポールで伝道活動に従事する。ギュッツラフはドイツ語や英語、オランダ語といったヨーロッパ諸語のみならずマレー語、タイ語、中国語、日本語といったアジアの諸言語にも通じていたという。彼は伝道活動にとどまらず、中国沿海部から朝鮮までの地域を探検したり、イギリス使節アーマストの通訳を務めたりとイギリスの海外活動のためにも活躍した。ギュッツラフの著作の大半を中国語によるものが占めるが、その中でも比較的有名なものがここでとりあげる『万国地理全図集』である。

『万国地理全図集』は、Wylie 1867によれば1833年から1838年まで発行された『東西洋考毎月統記伝』の中の世界地理に関する部分を集めたものであるという⁽¹⁰⁾。『万国地理全図集』は魏源『海国図志』に多く引用されたが、『小方壺齋輿地叢鈔』第82冊に収録された『万国地理全図集』はこの『海国図志』が引用した部分を集めて成ったものであるといわれる。本稿ではこの『小方壺齋輿地叢鈔』収録のテキストを使用した。

ギュッツラフ『万国地理全図集』における地名表記で注目されるのは、同時期または後世を問わず、宣教師による文章の中では翻訳借用による固有名詞表記が多いという点であろう⁽¹¹⁾。たとえばケンブリッジ (Cambridge) の表記では、現在の標準の表記「劍橋」に最も近い「干橋」という表記が現れる。同様にイギリスの地名を例にすれば、

中悉…Middlesex (20b14)

風素耳…Windsor (20b13)

緑威…Greenwich (20b12)

(下線は筆者による)

といった表記が見いだされる。下線部が翻訳借用による表記とそれに対応する原語である。西洋人宣教師ギュッツラフの名で著わされた文書にこのような表記が現れたということは、ギュッツラフ自身、すなわち西洋人がこうした翻訳借用表記を創造したとする説に根拠を与えているように見えるかもしれない。

しかし、これをもとにして西洋人による表記の可能性が最も高いとするには疑問を持たざるをえないであろう。すなわち、教育を受けた宣教師として原語の発音を知っていたに違いないギュッツラフが、固有名詞までも翻訳借用によって創造しようとするだろうかという疑問である。

たしかにドイツ語をはじめとしたヨーロッパ諸語は大量のラテン語を借用しており、その少なからぬ部分は翻訳借用によって自国語に取り入れられた。だが、地名ないし人名の表記を考えた場合、明らかに翻訳借用による表記は影を潜める。

例えばローマ時代の都市フローレンティア (Florentia、今のフィレンツェ) がラテン語の動詞 *floreo* 「花が咲く」 から来ているからといって、ドイツ語で「花が咲く」を意味する動詞 *blüen* を用いて *Blüende Stadt* という表記をするわけではない。これは英語でも同様であり、動詞 *bloom* を用いて *Blooming City* とは表記しないであろう。また、ローマ人の男性名としてよく用いられるクイントゥス (Quintus) がラテン語の序数詞 *quintus* 「五番目の」という語に由来するからといって、ドイツ語で *Füfter Sohn*、英語で *Fifth Son* にはならないであろう。

英語やドイツ語はこうした例からも明らかなように、中国語に比して翻訳借用による地名表記にとほしく、わずかに方角や新旧などを示す要素に見られる程度である。先述したように固有名詞の翻訳借用表記という現象が、占める割合こそ高くないものの中国語において目立った現象であることはもっと注目されてよいであろう。

ギュッツラフが『万国地理全図集』を著わしたときも例外ではなかったと考えられる。ギュッツラフはアジアの諸言語に精通した優

れた宣教師であったが、彼が単独で中国語の文章を著わしたというよりも、少なくとも筆述に関しては中国人の協力を得たと考えるほうが自然だろう。したがって、西洋人による翻訳借用表記の創造という可能性は中国人による可能性に比して小さいということが指摘できるのである。

3-2. 伝道文書の役割分担

19世紀に著された伝道文書において西洋人宣教師が完全に独力で著わしたものというのはそれほど多くはない。ほとんどの場合、著者として名前は現れないものの、中国人が何らかの形で文言の文章の潤色、修正に参加していた。本節では伝道文書における中国人の関わりを指摘し、文書作成の役割分担という方面から間接的ではあるが中国人による翻訳借用表記創造の可能性を示したい。

まず、中国プロテスタント伝道の創始者ロバート・モリソン (Robert Morrison) の時代から、すでに複数の中国人が語学教師として、また同時に彼の中国語文章の潤色や修正を担当する助手として雇われていた。その名前として李察庭、葛茂和、朱清などの名が見える。その中でも、葛茂和についてはモリソンが自分の翻訳についてみな葛茂和の修改校正を経ていることを認めているのである。またモリソンの著作である中国語文法書『通用漢言之法』においてはその例文でインフォーマントをつとめ、さらには漢訳聖書の詩編においてはその押韻を修正していた⁽¹²⁾。

また、このほかにも中国人が筆述を担当し中国語文書の修正や筆記に当たっていた例として、以下のような記述が認められる。ロンドン会の宣教師メドハースト (Walter Henry Medhurst) が Lew Tse-chuen なる中国人に会ったときの場面である。

One of the number, Lew Tse-chuen, a literary graduate, came to the author, in Mr. Morrison's room, in Canton; this man was baptized by Afah, about a year before, and living near, was induced to attend. He appeared an intelligent

man, but afflicted with an impediment in his speech, so that it was difficult to comprehend him. Resorting to the pencil, however, he soon made himself intelligible. He said, that he first heard the Gospel from Afah, about two years previously. He had been engaged in transcribing some Christian books, and being frequently at the house of our evangelist, heard him discourse morning and evening, on the Scripture⁽¹³⁾.

「その内の一人、Lew Tse-chuen は挙人であったが、広東（広州のこと：筆者注。以下同）のモリソン氏の部屋で著者（メドハースト）に会った。この男は一年前に阿発（中国人牧師梁阿発）から洗礼を受け、その近所に住んでいたことから（モリソンの部屋で行われていた安息日の祈りに）参加するよう誘われたのであった。彼は知的な人物に見えたが、言語障害に苦しんでおり、言っていることを理解するのは難しかった。しかし、鉛筆を執ればすぐに話が通じたのである。初めて阿発から福音を聞かされたのは2年前のことだと彼は言った。彼はキリスト教関係の本の筆記に何冊か従事し、宣教師たちの家にしばしばいるようになり、聖書について朝な夕なに交わされる会話を聞くことになったのだった」

また、中国人助手として彼は伝道文書の修正にも参加している。その及ぼした影響力の大きさも以下の文章から読みとれるであろう。

He is employed in copying for the missionaries, and by his perfect acquaintance with the native language, is able to suggest many idiomatical improvements in their productions, which have been, for the most part, adopted ; ...⁽¹⁴⁾

「彼は伝道文書を作成するために雇用されていた。彼は現地の言語に完全に通じていたから、その作品に対して多くの慣用語

面での改良を提案できたのである。それはほとんどの部分で受け入れられた」

さらには、梁阿発の子、Leang Atih についても中国語に関する以下のような期待が寄せられていた。

Leang Atih is the son of Afah, a lad of seventeen, now studying with Mr. Bridgman, in Canton. He has acquainted a tolerable knowledge of the English language, while he pursues at the same time his Chinese studies. He is quiet, attentive, and obedient; and was baptized in his infancy. Should he happily become the subject of serious impressions, and be endowed with a missionary spirit, he will be of much service to the cause, and may one day prove a valuable assistant in revising the Chinese version of the Scriptures⁽¹⁵⁾.

「Leang Atihは梁阿発の息子である。17歳の少年であり、いま広東のブリッジマン氏（アメリカの中国伝道創始者。Elijah Coleman Bridgman）の下で勉強している。彼は英語についてかなりの知識を習得しており、一方で同時に中国語も学んでいる。彼は物静かながら熱心で、そして従順である。幼少のときに洗礼を受けた。彼が幸運にも深い信心を持つ人間となり、伝教の精神を授けられたなら、彼は伝教に積極的に参加し、いつの日か漢訳聖書改訂の際にはえがたい助手となることであろう」

このように、中国人は西洋人宣教師たちの下で中国語文章のチェックを担当する係としての役割も担い、またそのように期待されていたのである。以上の証言は1830年代後半のことであるから、ギユッツラフが活躍していた時代、すなわち『万国地理全図集』のもとになったとされる『東西洋考毎月統記伝』が発行されていた時期とも重なる。

中国人が西洋人宣教師の文章を筆記・修正していたという事実は、伝道文書に現れた翻訳借用表記も彼らによる可能性が濃いことを間接的に裏付けていると考えられるのである。

3-3. アムステルダム表記例

最後に、アムステルダム（Amsterdam）の表記例からも同様の検討を試みたい。19世紀中では以下のような例が見いだされる。

- 安得堤（『外国志略』28a4）？
- 岩士達攬（『四洲志』19b9）1841
- 亜摩斯德爾登（『新釈地理備考』6.13a5）1847
- 亜摩斯德爾登（『瀛環志略』6.オランダ図）1848
- 俺莫士特爾坦（『瀛環志略』6.37a10-b1）1848
- 俺斯特但（『地理全志』15b8）1853
- 恩斯德爾敦（『地球説略』62b7）1856
- 安特旦（『乗槎筆記』）1866
- 安特坦（『航海述奇』）1870
- 安士得龍（『格致彙編』1877-7）
- 阿木思德丹（『随使英俄記』）1878
- 暗士蕩郎（『循環日報』1880.5/26）
- 阿母斯達木（『西洋雜誌』）1881
- 阿木司待爾達木（『西洋雜誌』）
- 亜摩斯得爾登（『西洋雜誌』）
- 阿馬斯湯（『出使英法俄国日記』）1886
- 阿摩斯通（『出使英法俄国日記』）
- 阿摩斯莊（『出使英法俄国日記』）
- 安賜德潭（『李鴻章歷聘欧美記』）1892
- 阿姆士莊（『李鴻章歷聘欧美記』）
- 阿姆斯特丹（『出使英法義比四国日記』）1894
- 阿姆士莊（『中東戰記本末』6.13）1896
- 安思丹（『泰西新史攬要』）1896

アムステルダムの表記もオクスフォードの場合と同じく対音表記がほとんどであるが、ここでは19世紀末に現れる「莊」という表記が目される。「莊」という表記を残しているのは

「阿摩斯莊」『出使英法俄国日記』(1886)

「阿姆斯特莊」『李鴻章歷聘欧美記』(1892)

「阿姆斯特莊」『中東戦記本末』(1896)

の三種である。この表記は部分的な翻訳借用表記と考えられよう。なぜなら上記の文献はいずれも上海音で表記されているため、「莊」の発音を示せば [tsɔŋ⁵⁴] となり、この発音は terdam の [tədæm] の対音としては明らかに不適切だからである⁽¹⁶⁾。

ただ、これがまったく対音を考慮していない表記であるとは言い切れず、[tsɔŋ⁵⁴] で ter ないしは dam をも表そうと試みている可能性はなお存在する。しかし、上表における「莊」という字を含まない対音表記では、ほとんどの場合において「特」「得」などといった字で ter に相当する部分が表記されている。ter が省略できるほどに聞こえの弱い部分であったとは考えにくい。

さらに興味深いのは、この表記において Amsterdam が Ams と terdam の二つの要素に分けられているという点である。Amsterdam はもともと「Amster 川の堤防」という意味であり、堤防と「莊」の語義との間に関係は見いだしがたい⁽¹⁷⁾。しかも、地名の由来に従うならば Amster と dam で分けられるのであり、「莊」を用いた表記のように Ams と terdam で切れるのではない。

ならば、なぜ Ams だけを対音表記して残りの部分に「莊」をあてたのであろうか。あるいは Amsterdam の対音が長くなるのを嫌って積極的に地名とは直接には関係のない語を付し、あえて対音部分を短くすることを意図したのかもしれない。

いずれにせよ、この表記が西洋人の手になるものとした場合、彼は地名を構成する要素の分かれ目を無視してまで翻訳借用表記にこ

だわるであろうか。西洋人——しかもこの場合は本国で高等教育を受けている——は Amsterdam という表記の分かれ目を知っていたらう。

ここで「莊」字の表記を持つ文献の筆者を見ると

「阿摩斯莊」『出使英法俄国日記』(1886) 曾紀澤

「阿姆士莊」『李鴻章歷聘欧美記』(1892) 林樂知・蔡爾康

「阿姆士莊」『中東戰記本末』(1896) 林樂知・蔡爾康

となる。『出使英法俄国日記』は曾国藩の子で清末の外交官・曾紀澤の作であるから、中国人が記したことは疑いない。他の2種についても、中国人筆記者として蔡爾康が加わっている。林樂知はアメリカ人宣教師アレンのことである。

従って、こうしたある意味「自由な」翻訳借用表記はみな中国人の手になった可能性がきわめて高いといえる。ここからも、中国人が翻訳借用表記を中心的に創造したと考えるのは自然なことと思われるのである。

4. お わ り に

以上、翻訳借用表記は中国人が主体となって創造された可能性が高いことが明らかになった。

今回新しく発見されたオクスフォードの翻訳借用による表記は、当時の上海における有力な報刊『万国公報』に現れたものであった。しかもその記事は中国人によって筆記されていたのである。時期的にも日清戦争後まで日本語から中国語への新語の流入はほとんどなく、外国地名を片仮名や平仮名のみならず漢字でも表記していた日本語からの影響は考えにくい。さらに当時の主要な英華字典はオクスフォードの構成要素である ox と ford に対して、みなそれぞれ「牛」「津」という字を指示していたのである。こうした事実は、英語を母語としない中国人に対しても翻訳借用表記を創造する条件が整備されていたということを裏付ける。

一方で、ギュッツラフの『万国地理全図集』において翻訳借用表記が多く見受けられるという事実は中国人による創造説への反証とされるかもしれない。しかし、外国人が対音表記による聴覚印象上の近似を棄ててまで翻訳借用表記にこだわる理由が説明できず、かつ英語やドイツ語において翻訳借用表記が中国語ほど豊かでないという事実を考えた場合には疑問を呈せざるをえない。

加えて、19世紀宣教師による文章の多くは中国人が潤色者としてかかわっており、また中国人にはそのような役割が期待されていた。中国プロテスタント伝道の創始者モリソンの中国人助手たちとその活動、および Lew Tse-chuen と Leang A-tih に関するメドハーストの記述はそのことを示しているといえよう。付け加えるならば、こうした証言が残された時期はギュッツラフが『万国地理全図集』のもとになる文章を著わした時期とも重なるのである。

さらにアムステルダムの表記に現れる「莊」という表記も、中国人が翻訳借用表記を創造したと考えるべき材料を提供している。「莊」という字を持つ表記の現れた文献がみな中国人の筆述者を持っていたためである。

我々は従来外国人宣教師の文書をそのまま当人の著作として扱い、彼だけが著述に関わったかのようにとらえがちであった。したがって実際には中国人が筆記者や訳語のアドバイザーとして関係した例が多かったという状況については、これまで十分に考慮されることがなかったといつてよい。

ところが本当のところは——少なくとも19世紀中においては——彼ら中国人助手の果たした役割は決して小さくなかったはずである。本稿ではその点に着目して論証を進めてきた。清末の宣教師による中国語著作とその中国語への影響を考える上で、中国人筆述者たちの存在を無視することはできないだろう。

註

- (1) ただし王論文は国語語彙史研究の立場から日本語における表記の変遷を中心に扱っており、中国語における変遷は副次的な位置しか与えら

れていない。

- (2) 荒川2000, p.108。なお、本論の執筆に当たっては当該論文に多くの啓発を受けた。ここに記して感謝したい。
- (3) 中国地名委員会1993。
- (4) 荒川2000, p.107。
- (5) 本来ならば『新釈地理備考』のほぼすべての(巻10の「呂宋」など一部を除く)固有名詞表記には口偏が付されているのであるが、ここでは印刷の都合から省いてある。
- (6) 『万国公報』(A Review of the Times) はアメリカ人宣教師ヤング・J・アレン (Young John Allen, 1836・道光16～1907・光緒33) が1889 (光緒15) 年に上海で復刊させた月刊誌。もとの名を『教会新報』(The Church News) といい、1868 (同治7) 年に週刊誌として上海で創刊。1874 (同治13) 年に『万国公報』(The Globe Magazine) と改められたが、このときの『万国公報』は1883 (光緒9) 年に停刊となった。しかし1887 (光緒13) 年に結成された在華西洋人によるキリスト教伝道のための団体・広学会 (The Society for the Diffusion of Christian and General Knowledge among the Chinese) の機関紙として1889 (光緒15) 年、英語名のみを変更して復刊。『万国公報』は中断する前から実質的な部数として2万部を誇っていたが、1890年代にいたり日清戦争を迎えると『万国公報』は戦況や海外の論評を詳しく報じ、大きく部数をのばした。戦後も以前からの変法派支持の姿勢を評価されて更に読者を増やしたのである。こうしたことから、日清戦争直後には『万国公報』の部数は4万部に達した。これだけの部数を有した報刊は1890年代においてほかにない。
- (7) 前後の号の「西国近事」担当者から考えると袁康ないし袁竹一という人物である可能性が高い。また、このふたりは同一人物であるとも考えられる。
- (8) ここで「英華字典」という語は華英字典および英語以外の西洋言語と中国語の辞書も含めている。
- (9) ここでは漢字表記の前ないしは後ろに付してあることの多いローマ字の中国語表記は省略してある。また、ford は「渡る」という意味で動

詞としても用いるが、本稿の論旨との関係から、名詞とその翻訳に限って記載した。また、華英字典によって中国語から英語という流れを見ると、例えばモリソン『英華字典』（1815-22）では「牛」について‘Those animals that the Chinese consider of the *Bos Genus*. Large victims.’、「津」について‘a ford or ferry’と解釈する。ウィリアムズ『英華分韻撮要』（1856）では「牛」を‘An ox’、「津」を‘A ford, a ferry; a landing place, a ghaut’と記す。ステント『漢英合璧相連字彙』（1871）では「牛」を‘the ox’、「津」を‘a ford, a creek, a rivulet’と説明し、シャルマーズ『粵英字典』（1872）では「牛」を‘large cattle (ox, cow, bull)’、「津」を‘pass over, a ford, moisten’とする。

- (10) Wylie 1867, p.60.『東西洋考毎月統記伝』は1833年にギュッツラフが広州で創刊。1837年にシンガポールに移るも翌年廃刊。間に2度の中断を含む。『東西洋考毎月統記伝』の「記」字については「紀」「計」とする説があるが、ここでは黄時鑒1997によって「記」とする。なお、書誌的な情報については黄論文に詳細な考察がある。「影印本導言」を参照。
- (11) この点に関してはすでに荒川2000に指摘されている。p.108参照。
- (12) この段落については蘇精2000に詳しい。ただし本書に引用されているモリソンの日記に関して筆者は未見。pp.57-77参照。
- (13) Medhurst 1838, pp.295。
- (14) Ibid., p.296。
- (15) Ibid., p.298-299。
- (16) ここに記した発音は Macgowan 1862、Rabouin 1883、周同春1988による19世紀上海音の再構音である。ちなみに銭乃荣1992によって現代の上海音を記せば [tsʌŋ⁵²] となる。
- (17) 英華字典によって「莊」の語義をみると、ウィリアムズ『英華分韻撮要』には‘Plants growing rank or luxuriantly; sedate, serious, grave, stern; correct in conduct; adorned; a farmhouse; a road’とあり、ステント『漢英合璧相連字彙』には「庄」という字で‘farm-houses, homesteads; plants growing; sedate’、ロブシャイト『漢英字典』（1871）では‘plants growing luxuriantly; stern, grave, serious, rigid, severe, sedate, adorned; gravity, dignity; a farm house; a

road' と解説する。いずれも「堤防」に相当する語義は見いだせない。

〈参考文献〉

- 荒川清秀1997.『近代学術用語の形成と伝播 地理学用語を中心に』東京：
白帝社
———2000.「外国地名の意識－「劍橋」「牛津」「聖林」「桑港」－」『文
明21』5、愛知大学：95-111
王 敏東1993.「意識された外国地名について－「紅海」の漢字表記をめぐつ
て－」『国語語彙史の研究』13：pp.229-246
沈国威編2000.『『六合叢談』1857-58の学際的研究』白帝社
千葉謙悟2000.「ヤング・J・アレンの訳著に見る固有名詞の表記」『中国
文学研究』26 早稲田大学：pp. 13-28
艾約瑟・慕維廉『中西聞見録』
裨 理哲『地球図説』華花聖經書房 1848
———『地球説略』華花聖經書房 1856
裨 治文『聯邦志略』1861
傅 蘭雅『格致彙編』格致書院 1876-92
傅蘭雅口訳・華蘅芳筆述『防海新論』江南製造局1874
郭実獵編「万国地理全図集」『小方壺齋輿地叢鈔』第82冊
黃時鑑整理1997.『東西洋考毎月統記伝』中華書局
(清) 梁廷枏『海国四説』中華書局 1993
李提摩太口訳・蔡爾康筆述『泰西新史攬要』1896
林樂知口訳・嚴良勲筆述『列国歳計政要』江南製造局1876
林樂知主編『万国公報』万国公報館
林樂知口訳・蔡爾康筆述『中東戦記本末』1896
(清) 林則徐「四洲志」『小方壺齋輿地叢鈔』第81冊
瑪 吉士「新釈地理備考」『海山仙館叢書』第113-118冊 1847
馬 礼遜「外国志略」『小方壺齋輿地叢鈔』第83冊
慕 維廉「地理全志」『小方壺齋輿地叢鈔』第84冊
———「大英国志」墨海書館1856
錢乃榮1992.『当代吳語研究』上海教育出版

- 蘇精2000.『馬禮遜与中文印刷出版』台北：學生書局
- (清)王韜『循環日報』中華印務總局
- (清)魏源『海國圖志』岳麓書社 1998
- (清)徐繼畲『瀛環志略』10冊 1844
- 中国地名委員會1993.『外国地名訳名手冊』北京：商務印書館
- 鍾叔河編1985.『走向世界叢書』長沙：岳麓書社
- 周同春1988.「十九世紀的上海語音」『吳語論叢』上海教育出版社：175-183
- Bennet, Adrian A. 1983 '*Missionary Journalist in China* Young
J. Allen and His Magazines' The University of Georgia Press;
Athens
- Britton, R. S. 1933 '*The Chinese Periodical Press 1800-1912*' Kelly
& Walsh Ltd., Shanghai
- Chalmers, J. 1859 '英粵字典 *An English and Cantonese Pocket-Dic-
tionary, for the Use of Those Who Wish to Learn the Spoken
Language of Canton Province*' London Missionary Society's Press,
Hongkong
- Doolittle, J. 1871 '英華萃林韻府 *A Vocabulary and Hand-Book of the
Chinese Language, Romanized in the Mandarin Dialect*' Rozario
Marcel & Co., Foochow
- Kwong Ki Chiu (鄺其照) 1875 '字典集成 *English and Chinese Dictio-
nary Comprised from Different Authors, and Enlarged by the
Addition of the Last Four Parts*' Hong Kong, The Chinese Printing
and Publishing Company
- Leang Shu Che (梁述之) 1878 '*An English and Chinese Dictionary,
in the Court Dialect*' Canton, Office of "WAN YIH", the Printing
and Publishing Book-store
- Lobscheid, Wilhelm 1866-69 '英華字典 *English and Chinese Dictionary
with the Punti and Mandarin Pronunciation*' Daily Press Office,
Hongkong
- 1871 '漢英字典 *A Chinese and English Dictionary*' Hong
Kong, Noronha & Sons

- MacGowan, John 1862 'A Collection of Phrases in the Shanghai Dialect' Shanghai, Presbyterian Mission Press
- Medhurst, Walter Henry 1838 'China: Its State and Prospect' London, John Snow
- 1847 'English and Chinese Dictionary, in two volumes' Shanghai, Mission Press
- Rabouin, P. P. 1878 'Dictionnaire Français-Chinoise, Dialecte de Song-kiang, Chang-hai, etc.' Zi-Ka-Wei Imprimerie de la Mission Catholique, a L'orphelinat de Tou-Sè-Vè
- 1883 'Leçons ou Exercices de Langue Chinoise Dialecte de Song-Kiang' Zi-Ka-Wei Imprimerie de la Mission Catholique, a L'orphelinat de Tou-Sè-Vè
- Stent, G. C. 1871 '漢英合璧相連字彙 A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect' Shanghai, Customs Press
- Williams, S. W. 1844 '英華韻府歷階 An English and Chinese Vocabulary, in the Court Dialect' 香山書院出版 Office of the Chinese Repository, Macao
- 1856 '英華分韻撮要 Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect' Canton, Office of the Chinese Repository
- Wylie, Alexander ed. 1867 'Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese' Shanghai, American Presbyterian Mission Press